

## 村落祭祀の日韓比較民俗試論

——大韓民国済州道北済州郡旧左邑金寧里の事例から——

政 岡 伸 洋\*

### はじめに

日本国内にとどまらず、周辺諸国との比較により、日本民俗の独自性を見いだそうとする比較民俗学は、近年になって盛んに行なわれるようになってきた<sup>1)</sup>。そして、アジアのなかの日本をいかに位置付けるかという本研究班の目的を民俗学的に検討する際に、この比較民俗学は有効的な手段になるかと思われる。そこで、本論ではこれまでの比較民俗学的な視点を継承しつつ、韓国の一村落における村落祭祀を事例として検討を試みたい。

さて、韓国における村落祭祀研究<sup>2)</sup>についてであるが、古くは日帝時代と称される日本統治期に村山智順の『部落祭』(朝鮮総督府, 1937)がみられるが、これは当時の植民地行政組織を活用して行なった調査データをもとにしているため、事例の曖昧さなど様々な問題点が指摘されている。そして、1960年代後半以降、いくつかの調査報告などもみられるようになったが、近年では朴桂弘の『韓国の村祭り』(国書刊行会, 1982)のように韓国の村落祭祀を総合的・体系的にとらえようとする研究もあらわれ、現在にいたっている。この朴桂弘の研究は、韓国の村落祭祀を明らかにするとともに、日韓比較の視点も取り入れられたもので、非常に注目されるものである。また、本論でとりあげる済州島の村落祭祀については、先の朴桂弘の研究のほか、済州島におけるすぐれた民族誌である泉靖一の『済州島』(東京大学東洋文化研究所、

\* 佛教大学非常勤講師、佛教大学総合研究所自由研究員(平成4、5年度)

1) 比較民俗学の課題については、竹田旦によって簡潔にまとめられており(竹田旦, 1991)、また八木透もその具体的方法として「構造的・機能的に分析すると同時に、実際の諸地域における習俗や慣行、すなわち民俗の実態をも重視しながら、これらの諸事象を、いわゆる人々の生活実態として考察せんとする研究視角をさす」としている(八木透, 1994)。

2) 韓国における村落祭祀研究の流れについては、朴桂弘によって整理されている(朴桂弘, 1982)。

1966), 済州島の村落祭祀に深くかかわる巫俗を対象にした玄容駿の『済州島巫俗の研究』(第一書房, 1985) などがあり, また済州大学校耽羅文化研究所からは『済州島部落誌』(済州大学校耽羅文化研究所, 1989~)と題する調査報告書も継続的にまとめられている。

ところが, 近年の韓国では近代化のなかで, 村落祭祀というものがなぜ存続してきたのかという点が無視されて, 逆に迷信打破の対象として否定的な面のみが強調され, その存続が危ぶまれつつあることが指摘されている(朴桂弘, 1982)。そこで, 本論ではこれまでの研究成果もふまえた上で, 村落祭祀というものがどのような民俗的背景のもとに展開され, 現在にいたっているのかという, 民俗の地域的展開にも注目してゆきたいと考えている。

つぎに, 本論の対象地である金寧(김녕)についてであるが, 現在の行政区画でいうと北済州郡旧左邑に属し, 済州市の東方約22キロメートルの海岸沿いに位置するムラである。本来は金寧里として, 一つのムラを構成していたが, 戸数が増加したため, 現在では東金寧里と西金寧里といった2つの行政村に区分されている。ただし, 日本のムラにあたるマウル(마을)としては, 現在でも金寧全体をさす場合が多い。

現在の金寧における生業としては農業と漁業が中心となっており, とくに金寧には湾があって, 天然上すぐれた漁場もあることから, 現在では漁夫と海女が多い。そして, こ



写真① 金寧の遠景と集落内の景観

これらの生業を背景としたさまざまな儀礼が存在しているのである。

これまでの研究から、済州島には儒敎式の村落祭祀と巫俗式の村落祭祀の2種類がみられることが指摘されており(玄容駿, 1973), その特徴として前者は男性が中心となつて行なわれるのに対し, 後者はシンバン(심방, 神房)と呼ばれるシャーマンが関与する点と, 女性が多く参加することから注目されてきた。そして, 金寧においてもこのような2種類の村落祭祀がみられる。そこで, 本論ではまず, 儒敎式の村落祭祀について検討し, つづいて巫俗式の儀礼についてみてゆくことにする。そして, 金寧でもっとも盛大に行なわれるチャムスクツと呼ばれる祭礼の分析をふまえた上で, 金寧における村落祭祀の特質について検討し, 日韓の比較民俗を考えるうえでの問題点を提示したい。なお, 本論では1993年9月8~14日にかけて行なった調査の資料の他に, 細かな点の確認については『済州島部落誌(Ⅰ)』(済州大学校耽羅文化研究所, 1989)の「北済州郡旧左邑金寧里」の項を参照し, 文中におけるハングル表記も現地の発音を尊重する意味から, ここに載せられているものを用いた。

## 1. 儒敎式の村落祭祀

金寧における儒敎式の村落祭祀はボジェ(포제, 酺祭)と呼ばれ, 正月の丁もしくは亥の日<sup>3)</sup>に酺神之霊を祀るものとされるが, その祭場については東金寧と西金寧では別の場所になっており, 行事もそれぞれ別々に行なっている。

東金寧では年末にある里の寄合で, 決算および事業報告のあとにボジェに対する協議を行なう。ここではボジェの経費および祭需と呼ばれる供物, 祭官などが決められる。また, 西金寧でも里長が運営委員会を召集して祭官を選ぶとともに, 各洞長を通じてボジェについての連絡事項を人々に伝えることになっている。なお, 費用については, いずれも住民全体で負担するが, 東金寧ではこの他に里政上で特別な収入があればこれも祭費として利用することになっている。

祭官については, 九祭官とも称し, 初献官・亜献官・終献官といった三献官(本官ともいう)のほか, 執事や呪文を読む大祝, 祭儀の際の司会者で忽記を歌う執礼, 三献官を手伝う典祀官, 祭官を引導する謁者, もし祭官のなかで不慮の忌事があった際の代わりとなる予次といった役職があり, これらは里長が召集した寄合(東金寧)もしくは運営委員会(西金寧)の席で, 正気福德にふさわしい年齢の者から選ばれることに

3) ボジェの行なわれる具体的な日については, 本論のなかで取り上げた祝文では16日になっており, このことから15日前後に設定されるものと考えられる。

なっている。そして、祭礼時の服装については、東金寧では里の事務所に保管してあるチョングム(청금, 青衿)・ユコン(유건, 儒巾)を着すことになっているのに対し、西金寧では初献官がサモカンデ(사모관대, 紗帽冠帶), 亜献官と終献官以下はトボ(도포, 道袍)とユコンを着用することになっている。さて、行事内容についてであるが、まず5日前に入祭し、マウルの入り口にはクムチュル(금줄, 禁繩)といって注連縄を張り、不浄の者の出入りを避けるという。そして、東金寧ではこの日から死者が出てボジェが終わるまで葬式を出すことはできないことになっている。また、祭官についても、東金寧ではこの日から身体を净めて祭庁で籠もりはじめ、この間はハンムル(향물)と呼ばれる香水で身を净め、食事も質素にして醢(塩辛)を出すことも禁じられるといい、西金寧でもこの日から祭官の外出を禁ずるそうである。

ボジェの前日になると、午後5時から6時頃にかけて供物を祭壇に並べはじめる。この時の供物としては、稲・粟・黍・稗の粘気の無いメ(메)と呼ばれる粳を供え、もし黍と稗がなければ粳米と粳粟でこれを補うことになっている。そして、犠牲物(生贄)として豚を1頭捧げ、これには毛血や内臓も一緒に供えられる。また、幣帛として絹織物や麻織物など、果物として棗や梨・栗・柿のほか蜜柑や林檎など、祭酒として清酒や甘酒・焼酎の他に井華水といって湧水のなかでもっともきれいなもの、セリやゼンマイといった野菜、串刺しされた肉である脯肉としてセコギ(쇠고기)と呼ばれる牛肉、ウロギ(우럭이)やチョギ(조기)と呼ばれる生魚とサメやタラなどの乾物およびアワビも供えられる。

これらの供物は主祝と執事によって祭壇に並べられると、その周りを屏風で囲み、そのあと待機所で祭官は待つ。そして、祭壇の周辺を異変がないか調べて回り、午後11時頃になると供えていた穀物を下げて蒸し、再び供えなおされ、子時(午前0時)になると、次のような酺祭忽記<sup>4)</sup>にそって儀式が行なわれる。

謁者引初献官 瞻視次詣神位前 引降復位 謁者引祝及諸執事入就拝位 北向立  
 祝以下皆四拝 鞠躬拝 興 拝 興 拝 興 拝 興 平身 引詣盥洗位 東向立 盥洗  
 各就位 謁者引献官皆入就拝位 西向立 謁者進初献官之左 白 有司 謹具請行事  
 行奠 幣礼 献官及諸位者皆四拝 鞠躬拝 興 拝 興 拝 興 拝 興 平身 行初献官礼  
 謁者引初献官詣盥洗位 東向立 盥洗 引詣樽所 執事者 拳覓酌酒 引詣神位前  
 北向立 跪三上香 献幣 酌 啓飯蓋正箸 献祝 小退跪 俯伏 読祝 興平身 引降  
 復位 行亜献官礼 謁者引亜献官詣盥洗位 東向立 盥洗 引詣樽所 執事者拳覓酌酒  
 引詣神位前 北向立 跪献酌 俯伏 興平身 引降復位(このあと終献官も亜献官と

4) 『済州島部落誌(Ⅰ)』(済州大学校耽羅文化研究所, 1989)所収。

同様の所作をする)謁者引初献官詣飲福位 西向立 跪 執事者以酌授献官 献官  
授酌 飲卒酌 執事者受虚酌 執事者以胾授献官 献官受胾 執事者受余胾 俯伏 興  
平身 引降復位 献官及諸位者皆四拜 鞠躬拜 興 拜 興 拜 興 拜 興 平身 撤籩豆  
献官及諸位者皆四拜 鞠躬拜 興 拜 興 拜 興 拜 興 平身 謁者引初献官詣望燎位  
西向立 蓋燎 謁者進献官之左 白 礼畢 献官以下出 謁者引祝及諸執事入就拜位  
北向立 祝以下皆四拜 鞠躬拜 興 拜 興 拜 興 拜 興 平身 出

そして、この時にあげられる祝文<sup>5)</sup>は、

維 歲次 甲子 正月 戊申 朔 十六日 癸亥 北濟州郡 旧左邑 東金寧里 代表献官 某  
敢昭告于 酺神之靈 伏以於赫明神 司我里域 大哉其位 盛矣其德 自古有年 實賴爾極  
煽動和氣 禳穢疾厄 五穀豐登 六畜蕃殖 維海所產 如山其積 願言驅魚 以連以続  
俾我東金寧里 永受多福 謹以牲幣 體齋梁盛 庶品式陳 明薦歲事 尚 饗

というもので、五穀豊穰や六畜蕃殖など、あらゆる生業の安寧を祈願するものであることがわかる。これらが終わるとウンボク(음복, 飲福)とよばれる直会がある。東金寧では祭壇近くにある待機所で豚の内蔵と頭を蒸して簡単に行ない、西金寧でも祭場で簡単に行なわれ、犠牲として供えられた豚はいずれも祭庁に戻ってから祭官および祭りに関わった人たちで分けられることになっている。なお、このポジェが終わると、西金寧ではチョワンジェ(조왕제, 竈王祭)やトシンジェ(토신제, 土神祭)といった新年祭が、儒式や巫式・仏式など各家によってさまざまな方法で行なわれるそうである。

さて、このポジェではいくつかの年占的な伝承もきかれる。東金寧では祭儀中に馬の鳴声がすれば良いといい、梗であるメを蒸すときに出来が良ければ豊作になり悪ければ凶作であるとか、メが倒れた方向は凶作になるといわれており、西金寧でも吉時の徴として馬や雉の鳴声があげられ、生のメと蒸したメから吉凶を占うそうである。

以上、東金寧・西金寧のポジェについてみてきたのであるが、現在ではマウルとしては金寧全体が意識されているにもかかわらず、これらは行政区である里を単位とし、その寄合でさまざまな役職や供物が決定されるなど、行政との関わりが顕著にみられ、その儀礼は儒教式で行なわれているのである。また、ポジェは正月に行なわれ、五穀豊穰や六畜蕃殖などあらゆる生業の安寧を祈願するのであるが、供物の面からみると、黍と稗がなければ稲と粟で代用するなど、ここでは稲と粟が強調されていることもわかる。さらに、このポジェにまつわる伝承から年占的な要素も指摘できる。

5) 『済州島部落誌(Ⅰ)』(済州大学校耽羅文化研究所, 1989)所収。

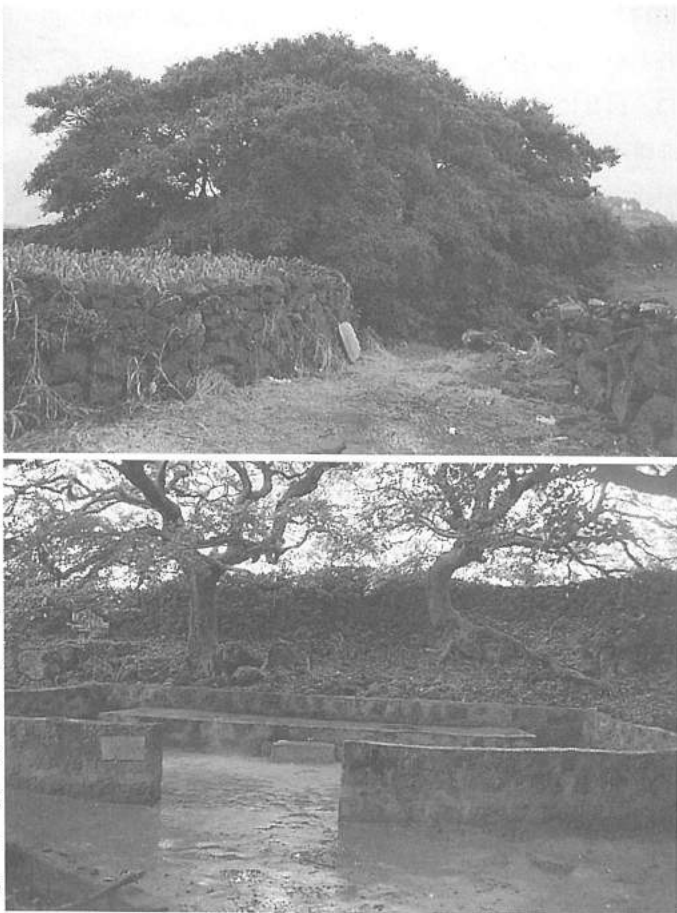
## 2. タンと巫俗的儀礼

先に述べた儒教的な村落祭祀の他に、金寧にはタンクッ(당굿, 堂クッ)と呼ばれる巫俗的な儀礼がいくつかみられる。ここでは、その祭祀場であるタン(당, 堂)ごとにみてゆくことにする。

### (1) 村落祭祀に関わるタン

マウルを単位として祭祀が行なわれるタンとしては、クンタン(큰당)とソンセキッタン(성세깃당)があげられる。

クンタンは大きなタンという意で、別に本郷堂(본향당)とも称される。これはマウルの守護神として認識されており、金寧では一般的にマウルのタンと呼ぶことが多い。これは集落から笠山峰の方へあがったところであり、まわりは畑となっている。タンにはボンプリ(본풀이, 本解)と称する由来を示す昔話が伝承されているが<sup>6)</sup>、クンタンのボンプリによれば、金寧の2つの金氏一族と黄氏一族が廻船を運営していたが、台風にあうのでこれを祀るようにな



写真② クンタン

6) 済州島のタンにおけるボンプリを網羅したものとして、秦聖麒『巫歌ボンプリ事典』がある(秦聖麒, 1991)。なお、このボンプリについては方言で語られることが多く、意味もとりにくいことから、今回は十分な検討を行なうことができなかった。

ったとされている。

クンタンの儀礼としては、正月にテジェイル(대제일, 大祭日)といって、13日から14日にかけて祭礼が行なわれている。これは本来、金寧のタンの祭礼のなかでも盛大に行なわれるものであったが、1970年代以降の迷信打破の影響により規模が縮小されてしまったといわれている。これに参加するのは主に女性であり、儀礼の内容については13日に信者がタンに集まり、イエミョンオリム(예명올림)と呼ばれる儀礼のあとに、これに参加した人々に対する占いを行なう。そして、14日にはトサンチム(도산침, トサンパトゥムともいう)と称する儀礼のあとに、金寧の各機関の安寧や新万穀食の豊凶など1年間のマウル共同の占いをし、厄払いが行なわれる。なお、この時の供物としては、シルトク(시루떡)2升とメ1鉢、果物や魚・ゆで卵・酒・野菜などが各家から集められ、祭壇に供えられることになっている。この他、クンタンでは7月13、14日にマプルリムチェ(마불림제)が、9月13、14日にはシマンコクテジェ(시만곡대제, 新万穀大祭)が行なわれている。そして、この年3回の儀礼の際にはいずれもシンバンが関与することになっている。

つぎに、ソンセキタンについてであるが、これは一般には船主のタンとか漁村のタンと称されており、そのポンプリにもここに祀られる神が船や海女を占有してひとつの家にしたという伝承が聞かれる。そして、船主や海女を対象に漁業などの安全を祈願するものとされている。しかし、このタンのある場



写真③ ソンセキタン



所は海岸から離れ、集落をはさんで山側の畑のなかにある。

儀礼については、正月18日に行なわれるシンクァセジェ(신과세제, 新過歳祭)のほか、3月8日のチャムスクッ(잠수굿, チャムスは潜水, クッは巫俗式の儀礼をさす), 7月18日のマプルリムチェ, 9月18日のシマンコクテジェといった年4回の祭礼があり、シンパンをよんで行なうが、供物はクンタンとほぼ同じものである。このうちチャムスクッは海女の祭とされ、金寧の祭礼のなかでももっとも盛大に行なわれるものであるが、これについては次章で検討したい。

さて、これら巫俗式の村落祭祀をみると、いくつかの共通点が指摘できる。特に注目されるのが、1月のシンクァセジェ, 7月のマプルリムチェ, 9月のシマンコクテジェというように、祭礼の日時が1, 7, 9月の15日をはさんだ日に設定されていることである。玄容駿によると、済州島のタンの祭礼には正月の新年祭である新過歳祭, 2月に来訪神を祀り豊穰・豊漁を祈願するヨンドンクッ, 梅雨祓いをして粟を中心とする雑穀の成長を祈る7月のマプルリムチェ<sup>7)</sup>, 収穫祭にあたる9月の新万穀大祭があり、これらは生業のあり方と大きく関わっている点を指摘しているが(玄容駿, 1985), 金寧でも同様の傾向がみられることがわかる。

## (2) その他のタンと儀礼

金寧には、これまでみてきた村落単位に祀られるものの他に、クェネキッタン(켄네깃당)やイルレッタン(일렛당)・ソムン ハルマンタン(서문 할망당)といった、いくつかのタンがみられる。ここではこれらについてみてゆきたい。

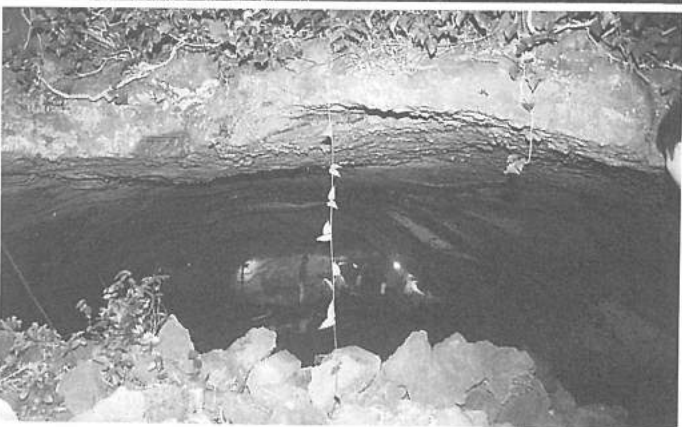
クェネキッタンは先に紹介したクンタンよりも少し山側にいったところに位置し、畑のなかに楠があって、その根元に洞窟がある。ここの儀礼として注目されているのがトッチェ(똥제, 豚祭)である。これは特定の決まった日に行なわれるのではなく、1～4年に1回、各家ごとに豚を1匹殺してこの堂神に供えるものであるが、特にその契機となる条件はなく、3～4年の間に変化がなく平穏であれば先祖の恩恵であるとして行ない、また新しい子供が生まれたりしても行なわれている。そして、金寧の出身者は他出してもこのトッチェを行なわねばならず、各家がさまざまな時期にこれを行なっていたことから、毎月1回は豚の肉を食すことができたともいわれ、豚を殺

7) その理由として玄容駿は、マ(마)は梅雨をさす方言であり、プルリム(불림)は祓いの意であることから、「済州島の粟作は梅雨と深い関係があつて、粟を播いた後、雨が続けば芽がよく出ないばかりではなく、成長も悪い。具体的な論拠は省くことにするが、その祭期が粟を中心とする秋穀の成長期であることを考えると、この祭儀は、梅雨祓いをして、粟を中心とする雑穀の成長を祈る天気調節の祭りだと思う」と述べている(玄容駿, 1985)。



すことを禁止されたことがあるほど頻繁に行なわれていた儀礼であった。

現在のトッチェは、各家の門前で巫式にシンバンをよんだり、儒教式で行なったりするなどさまざまであるが、儀式がおわると必ず隣家や親戚をよんでウンボクをすることになっている。また、本来のトッチェはクエネキタンまでやってきて、この洞窟のなかにある石の俎の上で豚を捧げていたそうである。そして、現在のように変化した理由とし



写真④ クエネキタン

て、堂神が笠山峰にあるときに生魂の血の臭いに堪えられなかったので各家の門前でシンバンをよんで行なうようになったとか、日帝時代にマウルの人々が集まるのを止めさせようとして禁止されたため、門前で密に行なうようになったともいわれているが、いずれにしても本来はこのタンに村人の多くが集まって行なわれていたことには違いない点が指摘できる<sup>8)</sup>。

つぎにイルレタンについてであるが、これは西金寧の入り口にあるナマリットンサン(하마릿동산)と称する小さな丘にあり、このことからナマリットン(하마릿당)と

8) 現在の状況からは家内の安寧と隣家との親和という機能を有しているとされている(済州大学校耽羅文化研究所, 1989)。しかし、現在このタンの洞窟内が発掘されており、そこから紀元前の土器が発見され、またこのポンプリには済州島成立神話に出てくる蘇天国と白祖に関する伝承がみられるなど、古くから祭場として祀られていたことがわかり、本来は異なった目的のための儀礼が存在していた可能性も否定できない。

もいうが、地元では一般にサンシンハルマン(삼신할망, 産神お婆さん)と呼ぶことが多いという。これは15才未満の子供の病気や育児に関する神であるといわれ、毎月7・17・27日にこのような子供のいる家が祀るが、たいていは正月と7月および9月に行くことが多く、その中でも正月がもっともにぎやかであるといわれている。ここのタンは石で囲まれ、床にはサグムバリ(사금파리)という陶器のかけらが散乱している。



写真⑤ イルレタン

儀礼としては、シンバンにやってもらうこともあるが、一般の人も名前と年齢を告げながら祈願する。そして、この時の供物はメ1鉢と林檎・卵・酒1杯とスッカラ(순가락)と呼ばれるスプーン1つを供えることになっている。このほか、赤子が成長したら、アギクドッ(아기구덕)と呼ばれる子育ての道具一式をここまで持ってくることになっているという。なお、このイルレタンはいわゆる七日堂にあたるものと考えられる<sup>9)</sup>。

また、ソムン ハルマンタンは西金寧の浦に位置し、そこにある岩を弥勒菩薩ハルバン(하르방, 爺)・ハルマン(할망, 婆)として祀っている。ここでは特別な祭日はなく、適当な日を選んで供物を持参し、シンバンと一緒に祈願する。この時、シンバンは祈願しながらノッサバル(놉사발)という蓋のようなものを2つ投げ、これが伏せた状態になれば息子、逆になれば娘、2つが別々になれば祈りが足りないかと判断する。

9) 七日堂は、子育てや治病神系の神が祀られるものとされている(玄容駿, 1985)。

供物としては、シルトクとメ、糸とコルレッペ(걸랫배)という7センチくらいの船、パラクン(바라꾼)という3色の布、チジョン(치전)、野菜、海魚などを供え、もう一度行く際にも同様のものを供えなくてはならない。なお、産神に対する祈子儀礼(子授け祈願)を行なう場合、本来はイルレッタンが中心であったが、大規模でやり方も複雑になるので、現在ではここですれば簡素にできるといわれ、こちらを利用する場合が多いという。

さて、これらのタンにおける儀礼をみると、不特定の日に祭祀が行なわれるクェネキッタンのトッチェについては、幾度かの変化を経ており、本来の意味についてはよくわからない。これに対し、子供の成長を願うイルレッタンでは毎月7、17、27日としながらも盛大に行なわれるのが正月および7月、9月の17日というように、先のクンタンやソンセキッタンの祭日と対応する傾向がみられる点が指摘できる。そして、祈子儀礼について、現在ではこのイルレッタンからソムン ハルマンタンの方へとその中心が移りつつあるのである。

### (3) クムルコサ(구물코사, 網告祀)

これまでみてきた儀礼は、タンをもとに行なわれるものであったが、ここではタンではないが注目される儀礼、クムルコサと呼ばれる漁業に関するものについてみて行くことにする。

クムルコサは海神祭とも呼ばれ、網を張っている砂浜でイワシなど小魚の豊漁を祈る儀礼である。日時は正月のなかで良い日を選び、午後7時30分ごろからはじめられる。この時の組織は金寧に4つあるクムルチョプ(구물집)と呼ばれる漁をする際の契という組織が単位となり、これが祭儀を主催することになっている。祭官としては、初献官・亜献官・終献官と両執事の5人で執り行われ、献官には生氣福德にふさわしい人から選ばれる。そして、これらに選ばれた者は3日間籠って斎戒するのであるが、この時に小魚の塩辛や豚肉は厳禁となっている。

儀礼についてであるが、まず上壇祭がある。これは海神之霊を祀るもので、海を背にして祭床を設け、そこにスッカラを使わずヒャンカジ(향가지)を2つ挿したメ4器と五果・乾魚・セリ・ワカメ・アワビ・甘酒・玄酒(井華水)・清酒・幣帛(麻1反)・豚とその毛血が供えられる。そして、3献官が4拝し、初献官が三上香と献幣して、甘酒献爵したあとに祝官が読祝する。そして、亜献官が玄酒を献爵し、終献官が清酒を献爵して、これらを下げた後に下直拝礼し、焚幣して終わる。これが本祭で、この後にはチムウム(치물음)といって、上壇祭で捧げられた豚の頭を韓紙に包み、毛血

とともにこれらを持って船に乗る。そして、約200メートル沖にでて、「今年は海神・竜神たちの助けによって漁場が良くなりますように」と祈願しながら、これらを海のなかへ投げ入れるのである。なお、このチムッウムを行なう人にはマルミョン(말뎡, 祝言)の上手な人を選ぶことになっている。

上壇祭が終わると、つぎに下壇祭がある。これには、上壇祭の際の巫献官のみと両執事が関与し、供物については上壇祭と同じものを供えるが、床に簾をかけて低く設置し、メは鉢に別々に供えるのではなく、大きなものに一つにまとめて供える。さて、儀礼についてであるが、まず巫献官が拝礼および三上香し、献爵する。この時の盃は小さなもので、この盃を執事が受けてメのご飯の鉢のまわりに供えて、スッカラを一つ挿してゆくが、このような所作を30回繰り返してゆく。そして、これが終わると誦祝「チャブシク(잡식)」といって、漁場でよく魚が獲れますようにと祝言をいながら、床に捧げた各種の供物を各鉢からスッカラで1匙ずつとって、海に投げ入れていくというものである。

また、上壇祭が終わり、下壇祭を行なうときに、各船ではコサ(告祀)が行なわれる。この祭儀は各船の船主と船員で行なわれ、船の船王と呼ばれる船霊を祀るための供物(メ1鉢、海魚1匹、豚足1つ、祭酒)を供え、拝礼してしばらくしたあとに香をし、盃をあげる。そして、盃に供物を少しずつとって前の海へ投げ入れ、儀礼は終わる。なお、この祭儀は、船と船員たちの海上安全と漁業の豊漁を祈願するものといわれている。そして、これらの儀礼がすべて終わると、祭場にてウンボクがあり、供物を分けて持って帰ることになっていた。

さて、このようなクムルコサも現在のような近代的な設備を採用し、さらにイワシも獲れなくなると、つぎのように大きく変化することになった。まず祭日についてであるが、3月中に、船員たちの年齢からだした生氣福德にあう日を選び、船内で行なう。そして、天気によければ海に出てするが、悪ければ海に船だけを出す。また、船で祭を行なうと同時に、西金寧浦のハンゲ(한개)でも別に行なわれ、これは浦神のためとされている。祭儀の執行は、船主が呼んできたシンバンがすることになっており、供物は豚1匹(頭でも可)・幣帛(麻・白紙・三色布)・果物などを供える。上壇にはメ9鉢、下壇にはメ1鉢も供えられる。祭が終わると、漁場と船の安寧を祈願して豚の頭を海へ投げ入れる。これを「チドゥリム(지드림)」という。また、供物を包んで海へ投げる紙には、海神に捧げる「ヨワンジ(요왕지, 龍王紙)」、海で亡くなった先祖の霊に捧げる「ヨワンチョサンジ(요왕조상지, 龍王先祖紙)」、自分自身のために捧げる「モムジ(몸지, 身紙)」などがある。このような祭儀はシンバンを呼ぶ巫式

で行なわれるのが一般的であるが、祭主によってさまざまな形態もみられるそうである。

以上、漁業に関する儀礼についてみてきたのであるが、その特徴としては漁業の際の組織がその単位となっており、本来は儒教式で行なわれていた点が指摘できる。そして、漁具の近代化などの変化によって、船ごとに行なわれる新たなクムルコサが、これまでの正月ではなく3月に、それも巫俗式で行なわれるようになってきているのである。なお、このクムルコサについて、本来は巫俗的であったのが、のちに儒教式に変化する事例が多いことが指摘されている(玄容駿, 1985)。しかし、この場合は逆であり、この事例が特異であるのかどうか、今後検討する必要がある。

### 3. チャムスクツの展開とその特質

さて、金寧の祭礼のなかでもっとも盛大に行なわれるものとして、ソンセキッタンのチャムスクツがあげられる。これは海女の祭りともいわれるもので、3月8日に行なわれ、基本的には竜王神を迎えて漁夫と海女の海上安全と豊漁を祈願するものとされているが、ここではその祭礼の展開についてみてゆき、その特質について検討を試みることにする。

まず、祭礼の準備についてであるが、このチャムスクツは金寧海女会に所属する者が中心になって祭儀が執行・管理されていることから、海女会長あるいは前会長が祭を行なうため7～8日間は誠意をもって身を清め、祭場を整備することになっている。また、供物を準備する家にもクムチュルを張り、不浄の者の出入りを禁ずる。

当日の儀礼については、シンパンをよんできて次の順で儀礼が行なわれてゆく。まず、チョガムジェ(초감제, 初監祭)といって、これは済州島の巫俗儀礼で最初に行なわれるものであるが、神霊を呼び集める儀礼がある。そして、サンゲ(상제)といってチョガムジェの際に漏れた神霊がないように、もう一度神霊を呼び集める儀礼がおこなわれる。これらのいわゆる請神儀礼がおわると、つぎにチュムルゴンヨン(추물공연, 出物供宴)と称する祭壇に集めた神たちに供物をいただいてもらうように、進んで祈りを捧げる儀礼があり、そのあとにヨワン セギョン ポンプリ(요왕 세경 본풀이, ヨワンは竜王の意)といって、農畜神セギョンの神歌を謡いながら祈願する。これは、農畜産物および海産物の豊作・豊漁を祈り、マウルの住民たちの生業の安寧を祈願するものとされている。そして、神様を楽しく遊ばせて所願を祈るソクサルリム(석살림)があり、これらが終わるとヨワンマジ(요왕맞이, 龍王迎え)といって、龍王

神が来る道をきれいにし、龍王神を迎え、海女の捕採物の豊漁と漁夫・海女の海上安全を祈願するのである。

竜王神を迎え、祭場に帰ってきて再びソクサルリムをすると、つぎにシドゥリム(씨드림, 種迎え)といって、ワカメやアワビ・サザエなど海女の捕採物の種を播く行事がある。これは、50～60歳のお婆さんたちが行なうことになっているが、これを務めることができるのはチャン(장)氏一族に嫁いだ者で、世代ごとに受け継がれていくというものであった。しかし、現在ではその後継者も絶えてしまい、海女の会員のなかからふさわしいものを選び、これを行なうことになっている。このシドゥリムをする者は、「シメントン(씨멘통)」(“種を入れた樽を担ぐ”という意)といって、粟の粒2～3升を持ってきて、祭壇の前で楽しく踊りながら、1人は東の方へ、もう1人は西の方へ行く。そして、楽巫たちはヨンムル(연물)という拍子を早くたたきながら、その後をついていくのである。その際、海辺・畑・森の中などどこでも自分が行きたい方向へ早足で、一生懸命かつ楽しそうに種を播いてゆき、海辺に戻って粟の種を播きおわったら、みんなで祭場に戻ってくる。すると、ここでも楽しく踊り、その後ゴザを敷いてその上でシンバンが「トンギョンクク(동경국, 東京国?)からソギョンクク(서경국, 西京国?)へ種を播きに行こう。ソギョンククからトンギョンククへ種を播きに行こう。アワビの種を播こう。サザエの種を播こう。トコブシの種を播こう。すべてを播こう。」と歌いながら、粟の種をゴザの上に播く。そして、播かれた粟の種の密度をみて、シンバンが海女の捕採物の豊漁についての占いをするのである。これをシチョム(씨점, 種占い)という。こうしてこれらの儀礼が終わると、シトゥリムをした人のために「ソウジェソリ(서우젯소리)」という歌を歌いながらシンプリ(신폴이)をするのである。

これらが終わると、次はヨワン チャサ ポンプリ(요왕차사본풀이)といって、チャサ神歌を歌いながら、海での厄がないように祈願し、サンダンスギョ トエクマグム(상당숙여 도엑막음)といって、「サンダン トスクウブソ(상당 도숙음서)」という辞説で上位の神を戻らせる支度をさせ、次にマウル全体の厄払いをする。そして、海女の着替え室(ボイラー室など)のいろんな場所にいる神たちそれぞれに祈願するカクト

ピニョム(각도 비님)とよばれる儀礼があり、そのあとにソンワンプリ(선왕풀이)をおこなう。これはペバンソン(배방선)ともいい、神を送る送神儀礼として位置付けられるもので、縄か板で簡単に造った船に供物を少しずつ乗せて海に送るというものである。そして、トジン(도진)と称するチョガムジェの時に迎えた神様を送る儀礼があり、これでチャムスクッは終了するのである。

さて、これらの儀礼をみると、現在のチャムスクッは竜王神を迎えて漁夫と海女の海上安全と豊漁を祈願するものとされているが、ヨワン セギョン ポンプリで農耕神の神歌をうたったり、行事のメインであるシドゥリムでは海女の採集物であるアワビやサザエ・トコブシの種を播くといいながら粟を播くなど、純粋な豊漁祈願ではなく、農耕儀礼的な要素も指摘できるのである。そして、この点についてはチャムスクッの行なわれるソンセキッタン(新万穀大祭)の位置が海岸沿いではなく、畑の真ん中にあることからもうかがうことができる。

## おわりに

これまで金寧の事例を通して済州島の村落祭祀についてみてきたのであるが、次の点が指摘できるかと思う。まず、済州島においても韓国本土と同様に儒教式のポジェと呼ばれる祭祀が行なわれているが、本土と大きく異なる点としてタンクッと呼ばれる巫俗式の祭祀も存在していることがあげられる。これは、祭祀をささえる基盤というものが、本土と済州島では異なっていることによるものと考えられ、本土のように儒教式の祭祀だけでは人々の信仰心を満足させることができないためと考えられる。そこで注目されるのが海女(ハルモニ)の存在であり、生業としての漁業である。そして、実際に現在でも金寧で最も盛大に行なわれる祭祀は、漁村のタンともいわれるソンセキッタン(新万穀大祭)のチャムスクッであった。ただし、ここで注意すべき点として、このチャムスクッには海女・漁夫の安全祈願の要素とともに粟に対するこだわりも指摘できる。

さて、これについて非常に興味深い点として、済州島の漁業は本来は農業における肥料獲得のためのものが後に発展し、農業よりも漁業の方が主になっていったという事実があげられる。つまり、本来は漁業もあくまで農業生産活動の一端を担っていたにすぎなかったのである(泉靖一, 1966)。そして、この農業の主たる生産物は済州島においては粟であった。そこで、これらの行事を年中行事的にまとめなおしたのが次の表であるが、これをみてもわかるように、クンタンと

表 金寧の村落祭祀と粟の生産暦

日時	タンの名称とその祭日	粟の生産暦
正月13～14日 17日 18日 戒丁或亥日	クンタン(大祭日) イルレクタン ソンセキッタン(新万穀大祭) ポジェ	年占的儀礼
3月8日	ソンセキッタン(潜水クッ)	粟の播種前
7月13～14日 17日 18日	クンタン(マブルリムチェ) イルレクタン ソンセキッタン(マブルリムチェ)	粟の成長儀礼 (梅雨前)
9月13～14日 17日 18日	クンタン(新万穀大祭) イルレクタン ソンセキッタン(新万穀大祭)	粟の収穫儀礼



ともに粟の生産暦と対応していることがわかる。そして、このソンセキッタンは、農業を基盤とした漁業の神であることが指摘でき<sup>10)</sup>、純粋な漁業神の祭りであるクムルコサとは区別されているのであった。また、この粟の生産暦に基づく成長過程の儀礼が、子授けや子供の成長に対する祈願と対応している点についても、金寧における民俗の基盤を考える上で非常に興味深い事例であるといえる。

しかし、その後農業よりも海女や漁夫による漁業の方に生活の基盤が移ってくると、ソンセキッタンが重要視されてくることになり、農業側でもテジェイルに代表されるクンタンの儀礼が衰退してくるのに対し、ソンセキッタンはますます栄えていくことになるのである。そして、ソンセキッタンの粟の農耕儀礼的要素は忘れ去られて行き、漁業神の要素が強調されて現在にいたることになり、さらに漁具の近代化によって変容したクムルコサもこの日へと習合されつつあるのである。このように、済州島の祭祀の基盤は本来、粟を基盤とする農耕儀礼であったが、のちに生業の依存度が変化すると、その漁業的な側面が強調され、現在にいたっていることが指摘できる。

以上、金寧の村落祭祀を事例として、済州島の村落祭祀の基盤として、粟というものに注意する必要性を指摘した。では、日本ではどうかというと、宮座については坪井洋文によって稲作の生産暦との対応が指摘されており(坪井洋文, 1977)、その他に祭礼と水利慣行との関連について言及されたものも多い(萩原龍夫, 1959・大橋力, 河合徳枝, 1982・市川秀之, 1988・政岡伸洋, 1992, 1993・和田光生, 1993他)。つまり、日本と済州島では同じ農耕文化を基盤としているにもかかわらず、そこには稲と粟という違いが存在しているのである。ただし、本論では済州島の一村落の事例を対象にしたにすぎず、それも日本の宮座に代表される神社祭祀と済州島の祭礼を比較するというように非常に粗いものとなってしまった点は否めない<sup>11)</sup>。そこで、今後の研究の深化を図る上で注目される視点を紹介しておきたい。それは、竹田旦による「琉韓比較民俗学」である(竹田旦, 1993)。これは日韓の民俗を比較する際に、独自の文化をもつ済州島や沖縄の民俗も考慮した上で検討する必要性を指摘したものであり、これからの日韓比較民俗論では単に日本と韓国というだけではなく、日韓本土と

10) このような視点については、北見俊夫も海女の「捕採物は畑の肥料にする馬尾草が主であり、食用の海藻類、貝類は副次的で、農耕生活の一貫として行なわれる。このような農耕文化の反映を示す点は、海藻類の採れないとき行なう潜水賽神に際し、神房が粟を海中に撒布し、それが種となって海藻の芽が出るという信仰にあらわれている」と述べている(北見俊夫, 1986)。

11) 今回は韓国本土の事例について触れることができなかったが、依田千百子や竹田旦の研究から、稲作文化を基盤とするさまざまな儀礼がみられることが知られている(依田千百子, 1985・竹田旦, 1995)。これらの比較については今後の課題としたい。

ともに済州島や沖縄との比較研究の重要性を提唱するものである<sup>12)</sup>。このような視点を継承しつつ、民俗の地域的展開にも注意しながら新たな比較民俗学構築のための実証的な研究を積み重ねてゆく必要があるものと考えられる<sup>13)</sup>。

#### 《参照文献》

- |              |   |
|--------------|---|
| 泉 靖一         | 1966 『済州島』(東京大学東洋文化研究所)                       |
| 市川秀之         | 1988 「祭・水・村——桜井江包・大西の御綱祭を中心として——」(『近畿民俗』117)  |
| 植松明石         | 1991 『神々の祭祀』(凱風社)                             |
| 大橋力・河合徳枝     | 1982 「近江八幡十三郷の伝統的環境制御メカニズム」(『社会人類学年報』8)       |
| 北見俊夫         | 1986 「済州島・潜女」(『朝鮮を知る事典』平凡社)                   |
| 秦 聖麒         | 1991 『巫歌ボンブリ事典』(民俗苑)                          |
| 竹田 旦         | 1991 「比較民俗学の条件」(『比較民俗研究』3)                    |
|              | 1993 「東アジアにおける済州民俗」(『日本語日本文学』3, 竹田1995に再録)    |
|              | 1995 『祖先崇拝の比較民俗学』(吉川弘文館)                      |
| 済州大学校耽羅文化研究所 | 1989 『済州島部落誌(Ⅰ)』                              |
| 坪井洋文         | 1977 「祭りの地域的諸形態——宮座研究の視点——」(『日本祭祀研究集成』名著出版)   |
| 朴 桂弘         | 1982 『韓国の村祭り』(国書刊行会)                          |
| 萩原龍夫         | 1959 「典型的な宮座」(『社会と伝承』3-3, 『中世祭祀組織の研究』吉川弘文館再録) |
| 玄 容駿         | 1973 「信仰儀礼」(『済州道文化財および遺蹟総合調査報告書』済州道)          |
|              | 1985 『済州島巫俗の研究』(第一書房)                         |

12) 沖縄を中心に韓国や台湾などと比較した研究書として、凱風社から出版されている『環中国海の民俗と文化』というシリーズがあり、この中の植松明石編『神々の祭祀』は本論のような祭祀からのアプローチにとって参考になるものである(植松明石, 1991)。

13) このような視点から注目される事例として、八重山諸島の祭礼があげられる。例えば、これまで稲作儀礼としてとらえられてきた竹富島の種子取においても粟の種子が用いられており、これらの祭礼との比較検討の必要性が指摘できる。